

2014. 2. 28

現代俳句千葉

112号

巻頭エッセイ

小野田さん、安らかに

幹事 木之下みゆき



「人を何人も殺めて、あなたには罪悪感はなかったのですか。」一人の若い女性であった。聴衆の感動の坩堝を打ち砕くように、その女性は、はっきりと強い口調で、いきなり斬り込んで来た。

その日、我が家の菩提寺で、小野田寛郎さんの講演があるというので出かけてみた。小野田さんといえば万人周知、三十年潜伏されたいたルバング島からの帰還兵。昭和四十九年三月十二日、帰国のニュースは日本中を駆け巡った。一緒にテレビを見ていた母は、うつすらと涙を浮かべ、「長い間、苦勞さまでした」と、深々と頭を垂れた。

その小野田さんに遭えたのだ。本堂は溢れんばかりの聴衆。坐像の親鸞聖人に目礼をされ、聴衆の面前に立たれた時、思わず息を呑んだ。今まで見たことのない人間の眼光であった。その光は澄んではいるのだが、怖ろしいほどに静かで鋭く、日本刀のような光を放っていた。帰国から三十年以上も経っているのにである。潜伏中、百数十回の戦闘を繰り返すうちに、十キロメートル先の敵の動きや僅かな葉っぱの動きまで見えるようになり、敵の銃弾を避けてこられたのだとか。

三十年間の極限状態での暮しは、衣・食・住のどれをとっても想像を絶するすさまじいものばかりだった。敵の動きの他に、小野田さんが一番恐かったのは、何日も続く雨だったらしい。ジャングルには雨を凌ぐ家がないのである。それまで考えたことも無かった。人間以外の動物は根本的な精神力と、生命に対する危機管理能力を持っているのだと話されたときはもう、極限状態とは、ほんの少しも理解できないものではないと、つくづく戦争の悲しさを思った次第である。

講演が終わり、呆然としてしていると冒頭の女性が問いかけたのである。小野田さんは少しもたじろがず、静かに答えられた。「あなたね、毎日が殺すか、殺されるかですよ。むざむざと敵に殺されたのですか？それが戦争なのです。みんな、精一杯戦っていったのです。今の感覚と価値感で物事を判断してはいけませんよ。」小野田さんのこの一言は私の胸を大きく抉ったが、冒頭の女性も大きく頷いていたので皆ほつとした。と同時に、いい質問をしてくれたと思った。私たちはややもすると、現代の感覚を優先して物事を思考するきらいが有る。一情報将校として、生と死の狭間で平和と戦争を見つめ、数奇な人生を送られた小野田さんは、この一月に天国へ向かわれた。最後の最後の日本兵だった。

目次

小野田さん、安らかに 木之下みゆき	1
諸家近詠	2～4
私の感銘句	5～10
ひろば	10
津田沼研究句会報告	11
青葉研究句会報告	12
柏研究句会報告	13
会員・会友の近況	14
掲示板	14

諸家近歌

話の種尽きてお開き女正月
 震るや夢に訪い来て居なくなる
 杉山は発火寸前春疾風
 戸隠いま余白の色に蕎麦の花
 一徹も生きる力よ七竈

國武 和子

たぶん死は冬のさくらのようにくる
 水仙の系図いちばん上は海
 水際や枯れには枯れの重さあり
 梅いまだ北の端たれか掴みいる
 まんさくのぬくもりほどでよろしいの

直江 裕子

紅葉狩峡の水音たかぶりぬ
 行きずりの紅葉ロードに刻忘れ
 ころばずに我が道ゆこう桐一葉
 湯上りの素足がよろし天の川
 人情の変らぬ湯宿菊の宴

中澤 一紅

春の水のんどの力甦る
 パーチャルのこの世に住みて蓬摘む
 開くまで折り続ける白つばき
 春満月われに近づく救急車
 墓穴を出てひかえめに生きていく

椿 良松

初水を汲む井戸ありて太る喉
 寒に入る古木の瘤が微光して
 音も無く秒針動く寒の入り
 味噌炒めする青葱の強かに
 深海魚眼の巨大なり寒月光

戸邊 光一

秘密法座視するままに冬の蝶
 冬麗甦りたる非国民
 沈黙は無罪セックスレスジャパン
 痴呆美の国作らんか四方の春
 火の牙を野に放ちけり秘密法

並木 邑人

砂利道に砂利足している日の盛り
 止り木の色より朽ちて鳥曇り
 裏面は拡大ミラーそぞろ寒
 サランラップの芯がころがり暮早し
 アポカドの種を突き刺し野分だつ

永井アイ子

決別の湖面に月の満ちてくる
 どんぐりの小さい順に通学路
 生い立ちのフィクション交え女郎花
 憧憬の恋とは違う野分たつ
 苦虫を嘔みつぶしたか菊人形

富澤ムツ子

蟬しぐれポテトサラダに酔をきかし
 土間抜ける涼しい風の煎餅屋
 秋めくや木工器愛用す
 白露かな色のほのかなシリカゲル
 わが影の沼に落ちたる冬至の日

浪本 恵子

年とれば影も年とる柳の木
 掴まれて昼寝の夢から逃げ出せず
 空井戸を覗けば遠い空だった
 著我咲いてやさしき人は許すまじ
 雪の街白い着物でさ迷いぬ

鳴戸 奈菜

被る人無くて長押の麦藁帽
 秋の雷頭割られたかと思う
 田舎家の目覚めの時計ほととぎす
 迎火や三代揃いスニーカー
 立秋や過労死しそう空調機

中澤 澄子

秋の噴水逡巡は人にあり
 郵便受最後に月光掴み出し
 観音のそり返る指冬に入る
 まだ人の気配かすかに冬りんご
 近道を手ぶらで帰り三の酉

野復美智子

百年の孤独の中の寒卵
 あたたかや伊豆山頂の信濃柿
 密にして母の胎内枇杷の花
 寒菊の臍脂たとうれば深海
 誰も知らない枯蓮の骨が哭く

袴田 菊子

初東風や成田山にてかざし加持
 田打桜街押し寄せて来たりけり
 コテージに夏霧深き目覚めかな
 青北風や誰それに声かけたき日
 夕されば谷津田に寒の芹摘みぬ

中村 博子

紙相撲の軍配上がるさくらさくら
 旧姓の黄楊の印鑑巢立鳥
 卯の花腐し両国のふれ太鼓
 自画像の髪の甘い小鳥くる
 秋あかね夫がぼつりと何かいふ

岡崎 翠

諸家近歌

冬桜悲運の仏頭和のあかり

栃木 きよ

仏頭に心奪わる夕時雨

静謐な目差授く月明かり

秋惜しむ念の躍動邪気払う

ユーマラスな手足の力み小鳥来る

永妻 和子

葉牡丹の渦や菩薩の御膝下

水底の静かに吐息川凍てる

島の待つ第一便や三ヶ日

吹き溜る落葉の樂園獣らは

学び舎の突貫工事棗の実

長浜 聰子

房総の先端を削ぐ冬怒涛

虎落笛老いに第三反抗期

静電気のような友だち水温む

牡丹の芽育てわたしはジェネリック

啓蟄や出会いがしらに静電気

中里 結

塩鮭の切口揃へ明日は雪

冬薔薇のひらきて耐ふる日数かな

フーコーの振りゆつくり冬深む

プロトケラトプスの脚が霜に立つ

黄金の海か枯野か阿弥陀仏

高田 柴秋

皴の手で一人のための胡瓜揉む

遊ぶ子の群れより飛ばす西瓜種

冬瓜の数を指折る節樽手

書きかけの稿を横目の夜食かな

残る蚊へ己の齢問はれけり

末生りは焦にあらず烏瓜

澤田 寿一

螢火のからみし糸を持ち帰る

涼風は時に諷いバスの旅

やさしさを捨てた男の衣被ぎ

草臥れし臓器ねぎらい鱒雲

芝崎 梓

メビウスの輪に疲れみえ四月馬鹿

ブルースの青の隙間へ小鳥来る

テロのない国の真ん中秋桜

遠ひぐらし終りのような始り

こおろぎの横顔人間探求派

高橋 節夫

色褪せし千人針や敗戦忌

父遺す軍刀に錆敗戦忌

疎開地の村は市となり敗戦忌

焼け出され馬小屋住まひ敗戦忌

ピカチュウにピカドン想ふ原爆忌

高野 礼子

何か思えよ桜の実落ちてくる

残鶯よわたしだけにという音譜

手さぐりの明日みのむしの目がよぎる

あのうわさ蜥蜴の尻尾から洩れて

秋寂しガラスケースに子規の杖

白井 春こ

まんじゅうが確かにあつた夜の秋

満月のまだまだ太るこちして

またひとり鯛雲から招待状

地震の国富士に背高泡立草

行く秋の水の重さを定めおり

水茄子やははその母素手素足

高橋 公子

沖繩忌ふたてに分かれ鷓鴣走る

月白や豆腐屋の猫抱かれにくる

コルセット肋にあたり花ハツ手

白鳥にコーンポタージュ温めおく

田口満代子

小鳥来る卓布のしろき荒涼に

柚子は黄に音沙汰は水影のよう

鶴渡るこよい音なく河荒れて

抜群の鳥の記憶や石露の花

たそがれの鬼のくるぶし芽吹くかな

種村 佑子

鶏頭の赤を油送船だと思う

空蟬になつてゐるのに本気の眼

紅葉活け一個の水になる正座

席譲られるなんて忽ち冬銀河

木枯やどこでも記憶りんりん鳴る

瀬尾 教子

斎田の空を自由に稲雀

霧深し重低音の鎮魂歌

落ちそうな心を吊す秋の虹

雁渡し背骨がずれてしまいそう

裸木になりし樺の夕日浴

高木 一恵

待春の象のはな子の皴に礼

兵と呼ばれ果つるを思う忘れ霜

爆心柱きみ渾身の新樹なり

誤字脱字脱わたくしや熱帯夜

貝塚の銀河濃き日々覗きけり

諸家近歌

対岸の舳いをほどく花浅沙

白木 暢子

見つけたり去年の秋の入り日色

秋の日の家の暗きの靴の数

手にとりし梨の重さに変わるもの

しんみりと十一月の膝を抱く

田中 喜翔

到来の冬瓜づくし徒食せる

可愛さの余つて食はれ雄かまきり

介添の刀自おぼつかな七五三

北窓と直角に電気敷毛布

指折つて苦吟勤勞感謝の日

菅ノ谷文子

秋日傘さらりと会釈かわしおり

蕎麦の花静かに村は眠りおり

薪能ぼとりぼとりと木の実落つ

団栗やころころ笑う少女おり

白き萩さらりと告知を聞き流す

田中 正恵

月明や仔馬ぬめぬめ立ち上がる

節分の豆が届かぬ空の青

霾や万歩計が狂い出す

白薔薇の白の矜恃にたじろぎぬ

観音の愁眉夏帽脱ぐ男

関 千賀子

煮凝や火の色知らず子の育つ

流れゆく花も芥も輩に

おほかたは地に帰りたる桜かな

行く春や銀の手回しオルゴール

ジョーカーは箒に乗れり青嵐

天のこと地のこと知らず銀河澄む

高野 春子

藤袴こきりと骨の軋むかな

大花野雲の一片許さるる

秋桜一面振り向けば富士

ほんとうの事は八手の花の中

末広 陽恵

二度三度虹の松原走る時雨

松浦船か川原に近き低き鱈

菊秋を真つ直ぐ届く読誦なり

霧晴れて鏡山かと思ひ当て

蘆刈を悠然として川曲る

島田 翠松

秋深きカフカの虫と太りるる

清流に落ちて巧葉の第二幕

自意識をはらり脱ぎ捨つ思ひ草

ふるさとは秋の背中の去るにほひ

高原の天空抱く秋の女

鈴木 典子

運動会園児みんなに金メダル

赤とんぼ大きな瞳の少女像

水仙のすつくと立ちて忌日くる

予科練やりんごと共にくる便り

布目から香りもみ出す柚子湯かな

下村 洋子

夕ざくら背骨に指の気配せり

手妻師の少年蝶を翔びたてり

地の塩になれぬおんなに霾れり

迂闊にも帰心からむ浜昼顔

浜昼顔自縛ゆるめる夕暮は

泪目のなかの狐火育ており

寺田美津江

自分史の最終章へ寒椿

まどろみはやがて鉛色祭笛

淋しさを手繰り寄せれば心太

利腕を置き忘れたる秋隣

中村 棹舟

一日を使い果たして冬至風呂

菊花展出て佛壇の花すこし

がさ藪となりし裏庭牡丹の芽

一斉に飛ばす飛行機春よ来い

夕日受け寺領を護る臥竜梅

西河しん平

一病と和したる漢春を待つ

様ざまな炎暑吐き出すケーブルカー

然りげなく西見る惑い木守柿

大寒やほほ笑みの石仏と合う

躓けば大しじまなる冬ざくら

長井 寛

どら焼の餡の有り体熊眠る

一枚の仕切もなく年始め

人日の真白き闇にはぐれおり

海じゅうのセシウムを呑む大海鼠

黒雲を呑みこんでゆく春満月

富澤さち子

横顔のまだ幼かり冬林檎

クレソンのこだわり立入禁止なる

万緑へ遊び疲れた三輪車

牡丹の開ききつたる陽の渴き

ソリストの一途なピアス夏果てる

私の感銘句

重田 忠雄

七転びぐらひは平気鬼栄蝶
なづな粥箸先にゐる陰陽師
早春の窓一つ足す設計図
冬銀河机の上の不等式
ロポットの悲しき手足啄木忌
芝桜おんな同志という疲れ
つくし野のご曲がっても童歌
みちのくを行く鬼灯を束にして
血の薄き日なり金魚の浮く日なり
瞑想に形があれば枯はちす

作者名 号頁

相原 一枝 108 2
伊藤 希眸 108 3
石崎多寿子 109 7
東 國人 109 7
加倉井允子 110 2
佐々木幸子 110 3
椎名 鳳人 111 4
田部井知子 111 4
塩野谷 仁 111 4
高橋由紀子 111 5

岩尾 可児

坊さん坊さんわたしはここに冬の虫
初詣唯心論の人となる
めでたさやゆずり葉の柄あかあかと
みんな良く笑う隣家の網戸かな
我が腸夜行列車の匂いせり
にんげんの非武装地帯島渡る
SLが好きで総立ちつくしんぼ
白守宮同じ匂いの人探す
遮断機の降りて上がって夏の恋
方眼の君からの死角龍の玉
SLが好きで総立ちつくしんぼ

横須賀洋子 108 2
浅野 天一 108 3
荒井 玲 108 3
大坪 秀生 108 9
大畑 等 109 7
鈴木 瑩子 109 11
國分 三徳 110 2
松澤 仲佳 111 7
川上 典子 111 7
神尾 浄水 111 7
國分 三徳 111 7

電車好きの孫を彷彿させてくれる句。

津田駅の近くに住んでおった関係で三・四才
位の時から毎日のように見に行っていました
が立ちん棒ではなく、しゃがみこんで車輪の動き出

すさまに興味があったらしく一時間でも二時間
でも見ておったようです。SLもあちこちの展
示場に連れて行って貰ってました。
作者の幼少時代はSLばかりで楽しかったこ
とでしょう。

檜垣 梧樓

帰省子と明日のパンを買いに行く
緑蔭に鶏と人間農学部
鷹の弾力が欲しどくだみ干す
梅を干すいくたび闇を抜けてきた
寒稽古卑弥呼と寝たことほると言う
伝言となりて青田を風渡る
聖五月たかあし蟹の面構え
人も石も無辺に積まる暮早し
来し方をばさつばさつと夏蜜柑
この花筏ならばかの魂寧からむ
寒稽古卑弥呼と寝たことほると言う

田部井知子 111 4
高橋 健文 111 4
鈴木 郁子 111 5
高桑婦美子 111 5
武田 伸一 111 5
鈴木 和子 111 5
小林 実 111 6
木之下みゆき 111 6
久保 筑峯 111 6
佐藤 映二 111 6
武田 伸一 111 6

飛騨高山の陣屋跡に山岡鐵太郎(鐵舟)の少
年時代の銅像が立っている。寒稽古婦りと見え
て竹刀と防具を担いでいるが実に威勢が良い。
掲出句、誠に奇怪な言い条である。寒稽古の後
だろう。井戸端で汗を拭きながら、「俺は夕べ
夢の中で、卑弥呼を抱いたぞ」と剣士仲間
に吹聴する男子がいる。「卑弥呼と寝た」と宣明
することが何か意味があるとは思えない。が、と
にかく面白い。山岡鐵舟、いや、武田伸一さん
なら本当に寝たかも知れない。

鈴木加寿子

法師蟬ときおり韻を踏み外し
郷関へ戻る術なし蕎麦の花

椎名 鳳人 111 4
千葉 智司 111 4

秋茄子は傷つき海の鳴りどおし
引力の薄らぐあたりからす瓜
かなかなは時空の岩に爪立てる
うねる丘諸霊いたわる花木榿
原発や角を出せないかたつむり
深爪の疼きだしたる原爆忌
銀漢濃し夜汽車いつしか濡れており
人も石も無辺に積まる暮早し
銀漢濃し夜汽車いつしか濡れており

庄司とほる 111 4
塩野谷 仁 111 4
清水三千代 111 5
竹内 絵視 111 5
高桑 弘夫 111 5
重田 忠雄 111 5
小林 実 111 6
木之下みゆき 111 6
小林 実 111 6

首都圏から遠く離れた、光害の少ない某町の
夜空に、銀漢が横たわっている。
作者の旅は、人に逢う為だったろうか。複雑
な思いを残し、別れの時間が迫ってくる。人は
別れる為に逢いに行くのであろうか。夜汽車は
いつしか夜露に濡れていた。濃しと濡れてで心
情を察するに余りある。

天の川銀河と、その端っこの地球と言う星で
の人間の営み、広大と微小を対比させた見事な
句である。

普川 洋

萩抜けて夕べ泥棒きたようだ
眠るとは体力であり冬椿
大僧正酔牡蠣の匂いしていたり
人間はよく手を洗ひ夏に入る
初蝶やコップに残る水半分
我が腸夜行列車の匂いせり
白鳥を見て来て甘く煮る牛乳
カメレオンのどこから秋になるのかな
血の薄き日なり金魚の浮く日なり

横須賀洋子 108 2
蛭名 節昌 108 3
植原 安治 108 4
内田 庵茂 108 4
石井 浩美 109 7
大畑 等 109 7
小野富美子 109 8
國分 三徳 110 2
塩野谷 仁 111 4

人体のあまたの出口山笑う 田沼美智子 III 5
血の薄き日なり金魚の浮く日なり 塩野谷 仁

血が薄いと感ずる日がある。別に貧血というわけではないが、何か不安とか気持の不安定な日がある。そんな日は金魚が苦しうに浮き上ることが多い。

いや金魚は空気を吸ってまた沈むだけかも知れないが、見ている方が不安だとそれを金魚に感情移入してしまうのだ。

金魚が浮くという自然な振舞いを、上の八音により金魚の死まで連想させてしまう言語操作のテクニクの冴えを感じる作品。

久保 筑峯

えんまこおろぎ陛下に髪は似合わない 吉岡 一三 108 2
余生とはまだある未来福寿草 相原 一枝 108 2
曖昧にこの世海鼠と渡りけり 青木 一夫 108 4
滝凍てて無言の威厳発しをり 大川富美代 108 4
音のある絵巻を捲る花火の夜 武田 和郎 III 4
夕顔を数えておれば夜汽車くる 塩野谷 仁 III 4
生きる面倒死ぬる億劫あみだくじ 高桑 弘夫 III 5
遠ければ遠いほど白花こぶし 高橋 宗史 III 5
田の眠り覚さぬように年明け 鈴木 和子 III 5
音たてて沈む夕日や沖縄忌 重田 忠雄 III 5
生きる面倒死ぬる億劫あみだくじ 高桑 弘夫
ここまで言い切れる作者の度胸のよさに感銘した。しかし、あみだくじで碎かれた。必ず死は来る。阿弥陀籤に当たる人は運がいいのか、当たらないのがいいのか。面倒とか億劫とか言っていない内が華である。

青木 一夫

振り向かぬ風を色無き風という 山崎 政江 108 2
掌中に雪を降らせるかな晩年 明石春潮子 108 2
慣れという心地おぼろの落し穴 石井紀美子 109 7
更衣湖一枚をふところに 香取 哲郎 110 2
春野菜しゃべり出したら止まらない 岡田 淑子 110 2
あざやかに入りし死角の夏の蝶 小高 桂子 110 3
冬青空裂け目つくろう糸がない 小林 雪枝 110 3
桃の花咲いて手のひらとどきどきす 久野 康子 110 3
狩人はことばの山へ勢子放つ 武田 和郎 III 4
聖五月たかあし蟹の面構え 小林 実 III 6
冬青空裂け目つくろう糸がない 小林 雪枝

なにげなく通り過ぎてしまいうちの生きたが、何度か読み返しているうちに作者の生き方のようなものが見えてきた。この青の極みの空に裂け目ができて縋る糸がないという挫折とも違う達観したものを感ずられる。自然界の中で一生懸命生きてきた人間像を感じさせてくれているところに一人の感があり共鳴させられた。

國分 三徳

木の実独楽はしかれどおし泣きとおし 岩尾 可見 108 2
腹の内みせぬ男の白緋 大村 錦子 108 3
まつ白な答案用紙稲光り 安斎謙太郎 108 3
母の日の母がだんだん重くなる 泉 志眞子 108 3
永遠の核融合や初日の出 浅野 天一 108 3
雪ぬくし都会の灯よりあたたかし 青木 一夫 108 4
桃・李どちらも咲いてかたづけかず 加藤 法子 109 8
じゃがいもに芽が出てひどい肩こり 岡田 淑子 110 2

ライトブルーの涙だった四月馬鹿 菊地 京子 110 3
花吹雪ここは最前列である 高桑婦美子 111 5
木の実独楽はしかれどおし泣きとおし 岩尾 可見

昭和の初め私が子供の頃、子供たちの遊び場の雑木林にはどんぐりが無造作に転がっていましたが。かっこよくて強そうなどんぐりを独楽に仕上げては腕白坊主が競い合ったものです。強い独楽とぶつ合うとそれこそ自分のはじき飛ばされていくようで、子供心にも悲哀を味わいました。易しくびたりと言いついてはいます。一方で、これは人生の側面を詠んだものとも思えます。辛く悲しく切ない人生です。私は幼い頃をなつかしく憶います。

瀬尾 教子

霧浄土かな山頂に穴一つ 椎名 鳳人 111 4
美しき嘘ありいわし雲朱色 千葉 智司 111 4
星とんで長崎の海闊厚し 鈴木 房州 111 4
狩人はことばの山へ勢子放つ 武田 和郎 III 4
血の薄き日なり金魚の浮く日なり 塩野谷 仁 III 4
煮凝りにつながつている北家族 鈴木 郁子 III 5
数百の影あり数百の目高 高橋 宗史 III 5
赤い灯の窓際未婚の雪達磨 重田 忠雄 III 5
落葉掻き人は大地に愛されて 杉山眞佐子 III 6
東京の新陳代謝ゆりかもめ 木之下みゆき III 6
高橋 富久江
白玉やいい人なのになやになる 横須賀洋子 108 2
競争の嫌いな子ども花キャベツ イザベル真央 109 8
町中の空うごかして鯉のぼり 岡崎 翠 109 8
息づまるほどなだれくる夜の桜 加藤 法子 109 8

ブルにもリングにもなる夏座敷 小野 裕文 110 2
 ボケットに春風も入れ一年生 岡山 敦子 110 2
 春野菜しゃべり出したら止まらない 岡田 淑子 110 2
 緑蔭に鶏と人間農学部 高橋 健文 111 4
 全山が空海の山天高し 重田 忠雄 111 5
 いくつもの手が出て菩薩あたたかし 佐藤 映二 111 6
 息づまるほどなだれくる夜の桜 加藤 法子

詩歌の世界で花といえは桜。誰もが桜に纏わる思い出を持つほどの、日本の国花である。蓄の時のときめき、咲き満ちた高揚感、散り際の美は生命の儚さ。同じ樹でも朝昼夜と違う貌を持つ。殊に月光を浴びた桜は妖しく美しく見る人に迫りくる。

作者は誰と夜桜を見ているのであろうか。息詰るほどの胸の高鳴り、想像力を働かせるといくつものストーリーが浮かんでくる味わい深い作品である。

細野 一敏

凍て星や汽笛の真似をする女 秋谷 菊野 108 2
 夕暮や籠の鶉の人嫌ひ 石井 稔 108 2
 もつたいない口癖の母蒲団干す 馬淵 津枝 108 3
 ビル高く迫る故郷の麦の秋 大坪 秀生 108 9
 我が腸夜行列車の匂いせり 大畑 等 109 7
 正月のしつぽが残る露地に入る 石井紀美子 109 7
 紙風船をつく老境を突く 加藤 法子 109 8
 介護者の指は水中花の湿り 加倉井允子 110 2
 血の薄き日なり金魚の浮く日なり 塩野谷 仁 111 4
 生きる面倒死ぬる億劫あみだくじ 高桑 弘夫 111 5
 我が腸夜行列車の匂いせり 大畑 等

「腸」は生命維持に大切な臓腑であり、心とも心根とも読める。この我が性根が夜行列車の匂いを導き出した。

この句が私を昭和三十年代にタイムスリップさせ、駅のホームの時間待ち、席がなく新聞紙を敷いて寝る夜行列車の床の油の匂いを思い出させた。八ヶ岳や日本アルプスの岩稜を熱病の様に挑んでいた山岳部時代の青春。

私にとつての「はらわた」はこの時代の登山そのものであり、その後の人間形成を培ってくれたと思っている。

椎名 鳳人

蛸や夜空荒立つことありぬ 伊藤 希眸 108 3
 日本のひらがな文化梅開く 井上きよ美 108 4
 我が腸夜行列車の匂いせり 大畑 等 109 7
 雪解けの庭に隠し仔やつてくる イザベル真央 109 8
 落鮎の終の寂光放ちけり 千葉 智司 111 4
 引力の薄らぐあたりからす瓜 塩野谷 仁 111 4
 緑蔭に鶏と人間農学部 高橋 健文 111 4
 体毛はヒトの触觉春の山 田沼美智子 111 5
 水音やさくら裏にいくさあり 鈴木 郁子 111 5
 東京の新陳代謝ゆりかもめ 木之下みゆき 111 6
 日本のひらがな文化梅開く 井上きよ美

「ひらがな」という言葉そのものから発生してくる心地良いひびき、床の間の一幅の掛け軸に収められた平仮名文字の韻文の調べ、客間の畳に早春の陽光をもたらす真っ白い障子、その障子に映って咲き初める一輪の梅の花、将に気品の高き日本の文化そのものなのである。

菊地 京子

一本のベンに攫われ月いざよう 山崎 政江 108 2
 倒木のしずかな呼吸朝曇 山口 智子 108 2
 雁皮紙に魂込めて巳年明け 岩岡 方子 108 4
 歩いてくる首より上は杜若 大畑 等 109 7
 春の月頬白鮫と打ち解ける 久野 康子 110 3
 凍蝶の上手に力抜いている 佐々木幸子 110 3
 夏椿散つて空との距離がある 小池美佐子 110 4
 緑蔭のベンチ大きく口開く 窪田 俊作 110 4
 なんばんぎせる人人は水に帰る 塩野谷 仁 111 4
 唇のしずかな水位羊歯ひらく 清水 伶 111 4

岡田 春人

全身が数へ日コーヒーぐいと飲む 伊藤 希眸 108 3
 母の日の母がだんだん重くなる 泉 志真子 108 3
 日盛や水を吐き出す貨物船 内田 庵茂 108 4
 鶯高音赤面したる父と居り 大畑 等 109 7
 競争の嫌いな子ども花キャベツ イザベル真央 109 8
 万緑のコンセントから充電す 國分 三徳 110 2
 水仙を活けて煩惱研ぎ澄ます 斉藤すず子 110 3
 パナナの皮剥きながら鏡見る 楠見 恵子 110 4
 葬送のわたしのアリア蓮見舟 佐藤 鈴子 110 4
 手芸品丹念に見る文化祭 白鳥 可桜 111 5
 万緑のコンセントから充電す 國分 三徳

日常、コンセントから充電するものに、携帯電話やカメラがある。これらは充電しなければ使用できない。この句「万緑」から「充電」へ飛躍したことで成功した。つまり、「の」で半分切つて、大きく「充電」へ飛躍し、「万緑」へ戻ってきた

のである。
人間は、自然（万緑）からいろいろの恵みを
いただいている。たとえば、水を飲まなければ、
（水を充電しなければ）生きていけないのであ
る。

吉野 精

我が腸夜行列車の匂いせり 大畑 等 109 7
 正月のしつぽが残る露地に入る 石井紀美子 109 7
 息づまるほどなだれる夜の桜 加藤 法子 109 8
 悪い児はいないおしくらまんじゅう 金子 未完 109 8
 春野菜しゃべり出したら止まらない 岡田 淑子 110 2
 バナナの皮剥きながら鏡見る 楠見 恵子 110 4
 緑蔭に鶏と人間農学部 高橋 健文 111 4
 花吹雪ここは最前列である 高桑婦美子 111 5
 梅干して闇をすっぱくしておりぬ 高橋富久江 111 5
 銀漢濃し夜汽車いつしか濡れており 小林 実 111 6
 春野菜しゃべり出したら止まらない 岡田 淑子

いまは春の野菜も夏の野菜も一年中スーパー
 などに売られている。しかしながら長い冬が去つ
 て、明るい春が来ると人間も動物もそして野菜
 も楽しくておしゃべりが止まらない。
 作者もいつまでも春であり青春である。

馬淵 津枝

白玉やいい人なのになやになる 横須賀洋子 108 2
 はなびらはさくらのなみだみちのくに 岩見ちづる 108 3
 七十路の角を曲がれば草紅葉 泉 志眞子 108 3
 十日ほどは干物も売って雪女郎 大畑 等 109 7
 大寒や赤児のように母くるむ 金澤 恵子 109 8
 蛸蚪に足ラストダンスの靴がない 加倉井允子 110 2

しゃぼん玉時空を超えてむむむ無 小高 稔 110 2
 水割りの中のシャンソン夏の雲 倉岡 けい 110 3
 深爪の疼きだしたる原爆忌 重田 忠雄 111 5
 梅を干すいくたび闇を抜けてきた 高桑婦美子 111 5
 水割りの中のシャンソン夏の雲 倉岡 けい

水割りを飲みながら旅の思い出に浸っている
 景であろうか。シャンソンとくれば、フランス。
 グラスの中の透明感に投影するものを詠み手に
 委ねる処にこだわりたい。

「夏の雲」の幹旋により、句にふくらみをも
 たらしているのが感じとれます。夕焼け雲を連
 想するのもよし。

大人の解放感と優雅な感触が伝わってくるド
 ラマチツクな作品。

黒澤 雅代

また河鹿人に後れていて普通 吉岡 一三 108 2
 七転びぐらひは平気鬼栄螺 相原 一枝 108 2
 風騒ぐまで花栗と知らざりき 金子 敏 109 8
 追ひかける夢はまだある葱坊主 片山 依子 110 2
 賑やかにすり切れメーデーの尻尾 木下 昌子 110 2
 豹紋蝶放つメンタルクリニク 坂間 恒子 110 3
 消灯のそれからの耳春おぼろ 小林 俊子 110 4
 ラファエロの瞳のさみだれを見て帰る 清水 伶 111 4
 石榴熟れむかしわれらに疎癖 塩野谷 仁 111 4
 梅を干すいくたび闇を抜けてきた 高桑婦美子 111 5
 豹紋蝶放つメンタルクリニク 坂間 恒子

豹紋蝶の鮮やかさとメンタルクリニクの一
 種の暗さとの対比。自由に飛んでいるような蝶
 であっても或いは何かを抱えているのかもしれ

ない。晴れやかに生きているように見えている
 人も又、メンタルクリニクを必要とすること
 もあるのだろう。
 人間の内面の重さを感じさせられる一句であ
 る。

戸邊 光一

巡礼のまひるの闇を黒揚羽 清水 伶 111 4
 神体は蛇ふり向けば豊の秋 椎名 鳳人 111 4
 美しき嘘ありいわし雲朱色 千葉 智司 111 4
 みちのくを行く鬼灯を束にして 田部井知子 111 4
 血の薄き日なり金魚の浮く日なり 塩野谷 仁 111 4
 梅を干すいくたび闇を抜けてきた 高桑婦美子 111 5
 いつも何か忘れし不安水母浮く 高橋富久江 111 5
 鶏頭が歩き出しそう村の昼 高橋 宗史 111 5
 朧夜の四柱推命信じそう 鈴木 和子 111 5
 赤い灯の窓際未婚の雪達磨 重田 忠雄 111 5
 梅を干すいくたび闇を抜けてきた 高桑婦美子

人生永い間には苦しみや厳しさが多々あるも
 のですが、作者の思いを「いくたび闇を」に集
 約して種々想像に広がりを持たせてくれる「梅
 を干す」は当たり前のことを言い得て妙であり、
 無駄を除いて省略が効いているところに魅力が
 ある。

竹内 絵視

十二色の和紙たちまちに雛の衣 石井 和子 108 3
 日本のひらがな文化梅開く 井上きよ美 108 4
 きんぼうげ丘の四、五戸は雲の裔 植原 安治 108 4
 息づまるほどなだれる夜の桜 加藤 法子 109 8
 わが齡乗せて急げり花筏 香取 哲郎 110 2

引力の薄らぐあたりからす瓜 塩野谷 仁 III 4
 星々の生死の行方冷まじや 清水三千代 III 5
 水音やさくらの裏にいくさあり 鈴木 郁子 III 5
 原発や角を出せないかたつむり 高桑 弘夫 III 5
 初稽古市松模様の会話飛ぶ 神尾 浄水 III 7

日本のひらがな文化梅開く 井上きよ美

文字は漢字から始まり楷書・行書・草書へと
 変化している。それはひらがなを生み出す予感
 にも満ちていた。漢字から受けつがれた文字の
 行方。日本人のソフトな感性がひらがなへとま
 ろやかな文字の舞と曲をかいま見せ、やがて文
 化へとほのかな奥行の拡がりは、梅のようなつ
 つましい花のほころびにも相通じる。

大村 錦子

手足みな来歴違ふ冬至風呂 大木 雪浪 109 7
 缶切りのいらぬ缶詰夢喜二の忌 及川 洋平 109 8
 白鳥を見て来て甘く煮る牛乳 小野富美子 109 8
 期限切れのソース瓶ある西東忌 岡田 淑子 110 2
 SLが好きで総立ちつくしんぼ 國分 三徳 110 2
 後期高齢ぼとりと蟬がおちました 小林 雪枝 110 3
 冬青空裂け目つくろう糸がない 小林 雪枝 110 3
 引力の薄らぐあたりからす瓜 塩野谷 仁 III 4
 アベノミクス無縁の路地裏恋の猫 鈴木加寿子 III 4
 遠ければ遠いほど白花こぼし 高橋 宗史 III 5

全員

実は二十五年一年間にわたくしが見たりきい
 たりためしたことがかりが全体に詩われて、そ
 の中の一句といわれてもこの十句の一句をとり
 出すことができませぬ。あえて申し上げるなら

ばこの十句は、歴史があり、政治があり、天体
 があり、生活観があり、自然があり、八十七歳
 のわたくしの心にひびく御作でした。

イザベル真央

炎屋を来て金管の真正面 山口 智子 108 2
 余生とはまだある未来福寿草 相原 一枝 108 2
 レジ通すきらりと光る秋の鯖 水村 魚愁 108 3
 まつ白な答案用紙稲光り 安斎謙太郎 108 3
 風船の紐が長く揺れる家 植原 安治 108 4
 春シヨール映画の闇に来てほぐく 石井 浩美 109 7
 春寒や漬け菜の石の傾ぐ夜 及川 洋平 109 8
 握手して力をもらふ薄暑かな 岡田 春人 109 8
 こわれそうな私からだセロテープ 小林 雪枝 110 3
 鶏頭が歩き出しそう村の昼 高橋 宗史 111 5
 余生とはまだある未来福寿草 相原 一枝
 私にも一人暮しの余生が始まっている。夫の闘
 病が終り娘達が結婚した。
 八十歳まで生きられると皮算用して、すでに
 八割がたは過ぎ去った。しかし、あと二割の余
 生という未来が残されていると、相原さんの俳
 句が気づかせてくれる。

馬場 馬子

終章の美しきもの蟬の殻 荒木 洋子 108 2
 日本のひらがな文化梅開く 井上きよ美 108 4
 早春の窓一つ足す設計図 石崎多寿子 109 7
 冬銀河机の上の不等式 東 國人 109 7
 大寒や赤児のように母くるむ 金澤 恵子 109 8
 子かまきり何度も草を滑り落ち 神山 宏 110 2

追ひかける夢はまだある窓坊主 片山 依子 110 2
 冬青空裂け目つくろう糸がない 小林 雪枝 110 3
 角出して長考に入るかたつむり 高橋 健文 III 4
 線量の有無は問ふまい未草 田端 重彦 111 5
 線量の有無は問ふまい未草 田端 重彦

あの原発の甚大な被害は、この先何十年と続
 くことです。私どもの近くの公園でも、除染が
 行われました。

作者としては、そうした環境の中で、睡蓮は
 何ごともなかったように、美しい花を咲かせて
 います。ここではセシウム等の話は脇におき、
 美を鑑賞しましょう。という心境かと推察しま
 した。本当は、問わなければいけないところ、『問
 ふまい』と言いつつたところに共感しました。

石井紀美子

春泥にピラ撒くやうに放射能 岩見ちづる 108 3
 逢えそうな本屋の灯り冬の雨 伊関 葉子 108 4
 冬空はフェルメールの青喪が明ける 石崎多寿子 109 7
 息づまるほどなだれる夜の桜 加藤 法子 109 8
 河鹿きく身体の水をかたむけて 坂間 恒子 110 3
 山桜ふわつと雲に乗りかえる 小林 俊子 110 4
 ラファエロの瞳のさみだれを見て帰る 清水 伶 111 4
 月光をノートに葉りけふを閉づ 谷本 元子 111 4
 赤い灯の窓際未婚の雪達磨 重田 忠雄 111 5
 遮断機の降りて上がって夏の恋 川上 典子 111 7
 逢えそうな本屋の灯り冬の雨 伊関 葉子
 掌編小説が書けそうな一句である。
 雨の中に燃る本屋の灯りが、淡い期待に仄か
 な灯りを心に点す。誰もが経験したであろう青

春の一頁とも……。

想いと願いが交差する微妙な心理が、季語に内蔵されている。何歳になっても持っていたい「こきめき」の心。

静かで奥床しい距離感が余韻を残す素敵なお句である。

袴田 菊子

陽炎やかの世へ渡る橋の上 香取 哲郎 110 2
 春野菜しゃべり出したら止まらない 岡田 淑子 110 2
 万緑のコンセントから充電す 國分 三徳 110 2
 百年後とは冬霧にたどり着く 菊地 京子 110 3
 十月のひかりと影のほか置かず 黒澤 雅代 110 3
 河鹿きく身体の水をかたむけて 坂間 恒子 110 3
 解氷音カリンと首のさびしさに 久野 康子 110 3
 消灯のそれからの耳春おぼろ 小林 俊子 110 4
 夕顔を数えておれば夜汽車くる 塩野谷 仁 111 4
 秋茄子は傷つき海の鳴りどおし 庄司とほる 111 4

中村 棹舟

にんげんに見送られ蛇穴に入る 秋谷 菊野 108 2
 十葉の花の白さよ津波跡 大塚 弘毅 108 2
 消しゴムの消し跡残す去年今年 市川 進 108 3
 正月のしっぽが残る露地に入る 石井紀美子 109 7
 散骨は賢治の汽車で銀漢へ 井上けい子 109 7
 わが齡乗せて急げり花筏 香取 哲郎 110 2
 うさぎにはなれない魚た昼寝する 小野 裕文 110 2
 お前さんもおひとりさまか木守柿 國分 三徳 110 2
 血の薄き日なり金魚の浮く日なり 塩野谷 仁 111 4
 深爪の疼きだしたる原爆忌 重田 忠雄 111 5

ひろば

■市原市文化祭俳句大会

十一月三日、市制50周年記念市原市文化祭が澤好摩氏を主催者に迎え開催された。兼題の部は県内の一〇八人から477句、中学生による第5回文芸コンクールでは8校から544句の応募があり、当日の席題句会は56人の出席をもつて実施された。(並木邑人記)

☆兼題の部／曼珠沙華・罌雲・雑詠三句一組
 市原市長賞

露深し腰入れて引く土蔵の戸 鈴木 喬二
 市原市俳句協会賞

長き夜のまた訳注にもどりけり 井原 美鳥
 市議会議長賞

分校の低き鉄棒曼珠沙華 重岡 昌子
 教育長賞

放牛の尾を高く振り罌雲 佐々木結花
 文化祭実行委員長賞

防人の歌は妹恋ふいわし雲 大関 博美
 ☆文芸コンクール／俳句の部

市原市長賞 三和申3年 今井 春日
 しゃぼん玉掴めぬ君の心かな

市原市長賞 市原緑高2年 遠目塚光輔
 稲刈りの後の田んぼはいい匂い

市俳句協会賞 湿津申3年 水川日南子
 石庭に薫風渡る龍安寺
 市俳句協会賞 市原緑高1年 大塚 侑奈
 本當の夢をしつてる流れ星

千葉・県民芸術祭 第55回千葉県俳句大会

平成二十五年十月二十日

◆雑詠の部入賞者

千葉県議会議長賞 船橋 齋藤 厚子
 坂の上に坂あらはるる蕎麦の花 市川 堀江 美枝
 千葉県教育長賞 かなかなや明日また使う鍬洗う

千葉県俳句作家協会会長賞 印西 樫本聖游子
 能楽師涼しき足を運びけり 松戸 水沢 和世
 千葉日報社賞 泉とは夕べの風の湧くところ

千葉市観光協会会長賞 君津 野口 友子
 麦秋の真つ只中に嫁ぎ来し

◆席題の部 席題「秋の草」「露」

【招待選者特選句】
 大木さつき特選 一城を仰ぐ静寂や露の秋 秋廣このみ
 塩野谷 仁特選 補陀落の一景として露の玉 細根 栗

鳥居 三朗特選 秋草に山の夕日のとどくころ 染谷 卓
 千葉市長賞 18点 加藤 法子

露の夜や若き遺影を父と呼び 16点 饗 秀麿
 千葉市議会議長賞 誰も見ず露生るる時消ゆるとき 13点 久保 砂潮

千葉市教育長賞 秋草や内緒話は風にのる 12点 菅谷たけし
 千葉テレビ放送賞 陽を巻いて転がり上手芋の露 10点 森 とし子

千葉市文化連盟会長賞 露の世の風のたよりといふたより

□□津田沼研究会報告□□

(於津田沼一丁目町会会館)

●第二五六回(平成二十五年九月十日)

司会 山中 葛子

死んだくせに秋の始めの畑に居
ブータンの山家小さく夜這星
蟻螂があるゲルニカ方の絵の中に
童巻が落としていった『俘虜記』かな
無事着けばメールは要らぬ天の川
鬼灯や裏口少しあけてある
母さんはいつでも一緒天の川
朝顔に申す言葉がありません
どす黒き雨音たてて九月来る
手にとりて梨の重さに変わるもの
疵の茄子山盛一杯地べたにて
日帰りや雷の向こうへ廻る
遮断機の向うしゃつきり白緋
筑波嶺に押し寄せてゐる夕芒
植込みに野ねずみ走る秋暑かな
狂四郎眠れぬ一夜熱帯魚
つくつくし副長官補難儀やなあ
賞味期限人間にもあり秋刀魚焼く

小林 実
榎垣 梧樓
後藤 章
大畑 等
横須賀洋子
岡田 淑子
希田沙知子
吉野 精
山中 葛子
白木 暢子
大村 錦子
林 阿愚林
なかもと淑子
楠見 恵子
股野 久子
大塚 弘毅
佐藤 晏行
金子 未完

●第二五七回(平成二十五年十月八日)

司会 小林 実

澄む水に映れる橋を人渡る
回れ右して急ぐひと秋の風
ようやと捨てる決心屋の虫
河馬二頭向きあつてゐる厄日かな
金木犀わたしは今も悪い子す
ゴリラ秋かゆいところに手がゆかぬ

後藤 章
佐藤 晏行
なかもと淑子
小林 実
横須賀洋子
吉野 精

絡み合う電源コード曼珠沙華
子規の忌はお櫃の匂いお腹の匂い
童巻の芯に巻かれし秋茄子
舌つよき母乳のひびき吾亦紅

風見鶏色なき風に逆はず
秋澄むやムイシユキン等は行列す
姉逝きぬ共に戦後の薯買いし
灯火親し伊万里の壺の置きどころ
梨を剥く絵葉書の文字大きくて
ネット依存症放つて置けばみなし栗
もう誰も知らない蟻螂の行方

●第二五八回(平成二十五年十一月十二日)

司会 大塚 弘毅

残る虫わたしの耳を宿として
荃太き鶏頭歩くかもしれぬ
さびしさの窓の数だけ月のぼる
秋蝶に同意を得たりわが柩
すすき原遊女差しだす長煙管
十月ざくら十一月の吹き溜まり
生き方が有季定型秋の風
式部の実ねたみそねみを一身に
牡蠣食へば松島の波きらめきし
すっぴんの方は優待紅葉狩り
カチカチと胡桃鳴らして箱おとこ
もう少し時間が欲しい海鼠かな
秋深む海の向こうのしゃれこうべ
騙す狸も解らぬホントの味
戻り来し落葉まみれの犬叱る
渡し舟ひとり乗り込む秋の川
破落戸の孤独寒星を友とせり

横須賀洋子
楠見 恵子
大畑 等
岡田 淑子
山中 葛子
村上 澄子
榎垣 梧樓
大村 錦子
希田沙知子
股野 久子
金子 未完
林 阿愚林

●第二五九回(平成二十五年十二月十日)

司会 吉野 精

古びつつ肉体めいている蒲団
キリストにどのセーターの似合うかな
煮凝りを無常な味と思ひけり
山茶花の垣根に鶏の首落とし
冬木立なら誰にでもある秘密
セーターの赤色違ふ二人かな
切つ先は喉へ向かつて枯木立
くれなるの葉から此岸をはなれゆく
シクラメン香りのないのも秘密です
十二月ばけつに国防婦人会
枯木星日本の空は狭くなりけり
冬の空綺麗よと遺書置き去りに
全山黄落にんげんに戻りけり
縞馬の縞のきらめき寒波急
茶化すまい菊人形の大マジメ
須佐之男の吐く息荒し山眠る
冬日向無形遺産の朝餉食ぶ
時雨くる轍いく筋交はりて
かつば寿司へ道を横切る螻蛄かな

楠見 恵子
吉野 精
横須賀洋子
大畑 等
白木 暢子
後藤 章
小林 実
佐藤 晏行
大村 錦子
村上 澄子
金子 未完
林 阿愚林
徳吉洋二郎
山中 葛子
なかもと淑子
岡田 淑子
大塚 弘毅
股野 久子
榎垣 梧樓

●第二六十回(平成二十六年一月十四日)

司会 横須賀洋子

廊下にて初湯の妻とすれ違ふ
抱きしめた時もあつたわ毛糸編む
切干やおふくろと言ふ常温
背中から冬を降ろして席につく
海鼠の夜大三元を振り込みぬ
賀状来るしばしとだえし女より
二日はや二階の気配消えており

後藤 章
金子 未完
村上 澄子
白木 暢子
大畑 等
吉野 精
林 阿愚林

よあけのぼんに月が流れて霜の庭
 ホームレスの冬鳥骨鶏を家長とす
 除夜の鐘百八つでたりるのか
 裸木の幹を叩けば走り出す
 あれば鷗あれば誰かのいかのぼり
 裏側が好きなら俳人寝正月
 歳晩やふやかしてゐる座り臍臍
 梟や珈琲碗の底に貌
 高みつつ尖りゆく波や青鷹
 元旦や短かき時間の始まりぬ
 数へ日や救国ぎぶみい・ちよこれいと
 一月のひかりを返す片男波
 来ぬ雪を待ちくたびれし服の犬

横須賀洋子
 檜垣 梧樓
 大塚 弘毅
 小林 実
 山中 葛子
 岡田 淑子
 股野 久子
 楠見 恵子
 徳吉洋二郎
 なかもと淑子
 佐藤 晏行
 希田紗知子
 大村 錦子

青葉研究句会報告

(於：千葉市民会館・第五会議室)

●第二十七回 (平成二十五年九月二十六日)

司会 長浜 聰子

美しき畏ひとむらの曼珠沙華
 敬老日賞味期限がちらちらす
 かまわれたくてついでくる後の月
 大花野若沖の鶏ひそみをり
 傷つきし町秋夕焼のふところ
 蛇穴にびんびんころりまたあした
 吾亦紅つぎの約束せぬ別れ
 蛇穴に入るやもとより人嫌ひ
 ところろ飯こんな暮らしてよいのかな
 鬼の子の笑顔見たことなかりけり
 満月の雫とも聞くワインかな
 あたふたと結句の不安木の実落つ
 ギリシヤから写楽の叫び星瞬く

細根 栞
 芝崎 梓
 鈴木 良松
 石井紀美子
 細野 一敏
 馬淵 津枝
 長谷川千枝子
 加藤 法子
 大塚 弘毅
 矢野 忠男
 山崎 幸子
 小高 稔

羊雲裊田阿礼は何処におる
 病院にまぎれていたり秋の蟬

並木 邑人
 長浜 聰子

●第二十八回 (平成二十五年十月二十四日)

司会 矢野 忠男

大小の秋日凹ませ陶器市
 唐辛子激しきまませ逆さ吊り
 真昼間の水は動かす草の花
 秋櫻少し残りし赤絵の具
 ひぐらしのしまいの声ともはしめとも
 響き合う大草原の朝の露
 脳細胞に隙間びつしり秋ざくら
 神仏の御歳不詳新松子
 蓑虫や携帯持ちて閉じこもる
 猫じやらし少年の日が透けてくる
 子に貰ふ名刺は小ぶりが今年酒
 膝笑つたり笑われたり牛膝
 明治座に踏み込むつもり栗名月
 水澄みて御伽の国の水車かな
 稲光イグアナドンの動き出す

加藤 法子
 馬淵 津枝
 細根 栞
 矢野 忠男
 椿 良松
 石井紀美子
 長浜 聰子
 山崎 幸子
 大塚 弘毅
 芝崎 梓
 長谷川千枝子
 細野 一敏
 並木 邑人
 小高 稔
 鈴木 陽子
 椿 良松
 並木 邑人
 加藤 法子
 小林 実
 山崎 幸子
 鈴木 陽子
 細野 一敏
 馬淵 津枝
 芝崎 梓

●第二十九回 (平成二十五年十一月二十八日)

司会 山崎 幸子

雪吊のされし松より力抜く
 木守柿になりたい人は登りなさい
 目ん玉を置いて茸山を下りる
 冬ざるる井戸を覗けば翁面
 十一月ほかあんとした時がある
 漂泊はをのこのものや毛糸編む
 かあちゃんの出臍しゃないよお茶の花
 暮もまたお隣同士菊日和
 生と死のへだたり淡く花八つ手

椿 良松
 並木 邑人
 加藤 法子
 小林 実
 山崎 幸子
 鈴木 陽子
 細野 一敏
 馬淵 津枝
 芝崎 梓

二人だけの空間銀河の昇降機
 手抜きした樹が大袈裟に枯れており
 ふと齡十一月の日だまりに
 小六月句友句仇一人天敵
 お揃ひの赤いマフラーノール
 乃木坂晩秋人声の影となる
 一歩ずつ登れば晴れる霧の山
 返り咲き老人ホームの芝桜

石井紀美子
 長浜 聰子
 長谷川千枝子
 矢野 忠男
 大塚 弘毅
 徳吉洋二郎
 細根 栞
 小高 稔

●第三十回 (平成二十五年十二月十二日)

司会 小高 稔

蒟蒻をなだめては切り日短か
 十二月八日風呂の湯あふれさす
 ほどほどの懐工合山眠る
 診断は加齢酒川の長い橋
 逝く秋を慳の木あたりで見失う
 クリスマス観音開きに肉切られ
 雪女郎千秋楽をせり上がる
 梟と睨めっこしてギブアップ
 寒椿うかと真赤な嘘こぼす
 雪ばんば巾着閉じたり開いたり
 小春日や空桶一列欠伸
 やさしさの時に疎まし冬桜
 少年の後方びたびた来る師走
 三の酉おかめ気儘に売れ残る
 海の底ざわめき絶えず水仙花
 絵手紙の銀河にかけし縄梯子
 無造作に挿され利久の佐助は

芝崎 梓
 山崎 幸子
 長谷川千枝子
 徳吉洋二郎
 保坂ミエ子
 馬淵 津枝
 小林 実
 小高 稔
 長浜 聰子
 加藤 法子
 並木 邑人
 鈴木 陽子
 細野 一敏
 矢野 忠男
 大塚 弘毅
 石井紀美子
 細根 栞

●第三十一回 (平成二十六年一月二十七日)

司会 長浜 聰子

人間に野性枯野に火の匂い

細根 栞

白菜の芯の強さは母のもの
 ジョーカーは手の内にあり女正月
 スワン浮く生はしずかに死を含み
 寒牡丹囲いを出たいとは言えず
 大つばらに泣きついた日のポインセチア
 どんどの火数多の葬を送りけり
 煮凝りや目をつつくなと魚云う
 女正月話の中が混んでる
 冬満月街の明かりを統率す
 ポツポツがあららありやと梅の花
 正月や狼なれず人である
 反骨の骨擦りゐる三日かな
 幼らがリズムとる腰薙打ち
 ゴンドラの別れて会う冬木の芽
 川霧に匍匐前進人妻よ
 北寒ぎふるさと訛おほつばら
 風花す脳裡の奔馬目覚めたり

樫 良松
 徳吉洋二郎
 芝崎 梓
 加藤 法子
 馬淵 津枝
 矢野 忠男
 大塚 弘毅
 石井紀美子
 小高 稔
 山崎 幸子
 細野 一敏
 鈴木 陽子
 保坂ミエ子
 長浜 聰子
 小林 実
 長谷川千枝子
 並木 邑人

柏研究句会報告

(於：柏市「ハックルベリー」2階)

●第十七回 (平成二十五年十月十二日)

司会 栃木 きよ

医学書を繙く背中虫の闇
 すれ違う男の子ペーミント系
 秋暑しぐらぐら茹でる落花生
 軽い男四人殺めて親鸞忌
 花野原だあれも勝たぬじゃんけんぼん
 日を返す力は水に破れ蓮
 麻布狸穴江戸っ子の穴惑い
 ぼけつとの飴の数ほど返り花
 缶ビール妻と二人で半分こ
 秋うらら草鞋七百八拾円

小林 俊子
 栃木 きよ
 佐藤 鈴子
 松澤 龍一
 大畑 等
 野口 京子
 長井 寛
 下村 洋子
 岡田 春人
 イザベル真央

●第十八回 (平成二十五年十一月九日)

司会 大畑 等

冬虹を一夜匿まうアコヤ貝
 金木犀桶屋のとなり金物屋
 湯湯婆の口よりこ聞ゆ海潮音
 柘榴割れ過去は鮮やか甘酸っぱい
 三つ編みのツインテールや文化の日
 神無月世々を見据える八咫鏡
 放たれて枯野の犬になつてゆく
 鳥の首自在に秋の沼探る
 秋冷やバターナイフにある曇り

下村 洋子
 大畑 等
 長井 寛
 佐藤 鈴子
 栃木 きよ
 小林 俊子
 岡田 春人
 野口 京子
 松澤 龍一

●第十九回 (平成二十五年十二月十四日)

司会 大畑 等

寒鰯を捌く男の指愛し
 淡淡と櫂の跡通学路
 背信や身内に氷柱太り出す
 七つもの雪の品書き斜陽館
 ラ・フランス弾む今宵の円い月
 おちば落葉いのちの端の音を聴き
 新しき鳥噴き生れて小鳥くる
 監視カメラすり抜け冬のウオッチング
 一晚の雨であの世の落葉道
 有季定型下仁田葱の掻き揚げと
 口論の果て木枯と出会いけり
 逆光の肉屋疾走の蝸牛

下村 洋子
 栃木 きよ
 小張 直子
 長井 寛
 野口 京子
 伊藤 希眸
 佐藤 鈴子
 小林 俊子
 岡田 春人
 大畑 等
 高橋 宗史
 松澤 龍一

●第二十回 (平成二十六年一月十一日)
 司会 小林 俊子

柚子風呂を出ていきいきと肉匂う
 散りてなおしがらみ断てぬ冬紅葉
 雪女抱いて陰影紙の月

岡田 春人
 小張 直子
 佐藤 鈴子

身の内に独楽を放ちて転生す

雪解川反骨心を見失う
 寒鴉小塚の中の黒胡椒
 黙らせる凍土の歪み百まなこ
 大王烏賊の眼炯々寒の入
 狐火に就き行く老母すでに風
 細雪降るかも茶柱立つてゐる
 ヤマガチオトヤ寒三日月を懐に

下村 洋子
 栃木 きよ
 イザベル真央
 小林 俊子
 長井 寛
 大畑 等
 伊藤 希眸
 松澤 龍一

●第二十一回 (平成二十六年二月一日)

司会 小林 俊子

立ち食いの生牡蠣すすり男去る
 すべり出す船寒晴れに胸正す
 恋の歳月立春の橋渡る
 線描の木々の節々霜枯れて
 啓蟄や畳み置かれし網タイツ
 寒晒しさらしきれないけもの臭
 蟠りのんどに問う大嚏
 満員御礼土俵の春を勝名告る
 狐火や団鬼六の蔵書印

佐藤 鈴子
 野口 京子
 岡田 春人
 小林 俊子
 栃木 きよ
 下村 洋子
 長井 寛
 伊藤 希眸
 松澤 龍一

■総会・俳句大会のお知らせ

既にお知らせした通り

三月十六日(日)に千葉市文化センターに於いて総会・俳句大会が開催されます。

総会 十時半開催

俳句大会 十三時より(席題発表は十時)

是非ご参加下さい。

《会員・会友の近況》

- ・新春およろこび申し上げます。よろしくお願ひします。「私の感銘句」の選句むずかしい、好みになってしまいました。歳を思うとさて、この一年をどうなるかと不安、その分業してみたいと思っています。細々と「華」俳句会で楽しんでます。(菊地 京子)
- ・俳句はやればやるほど難しいが面白い形式である。(鳴戸 奈菜)
- ・去年、文化の日に「国宝興福寺仏頭展」を鑑賞致しました。(芸大美術館・於)白鳳の微笑と板彫十二神将像の表情豊かな躍動感等々。雑念が浄化されるような時間に浸って参りました。(栃木 きよ)
- ・俳句・謡曲とよくまあ欲張って頑張っております。これからまだまだですが、また新しい境地が開けます様と組んでいきたいものです。(末広 陽恵)

掲示板

《会員・会友異動》

- 逝去 (会員) 西宮はるゑ
 - 入会 (会員) 飯島治蝶、近藤栄治
 - 転入 倉田たへ子(柏市旭町)
 - 退会 (会員) 五十嵐良一、石井和子、今村博子、金子一江、田部井知子、水治悦子、山本敦子、大橋 浄、時田久子、宮部華好
 - 俳号変更 小河源清江(旧 高原遥春)
- 平成二十五年第四回幹事会
日 時 平成二十五年十一月二十六日(火)

場 所 プラザ菜の花 四階「楨」

出席者 大畑、秋尾、渡辺、並木、檜垣、内田、高橋(宗)、野口、松澤、上野、大塚、小高、木之下、山崎、小林(俊)、小林(美)、白木、高橋(健)、林、星野、細野、森村、矢野、吉野、長浜、清水、下村、三須

欠席者 久野、小張、高木 (敬称略、順不同)

議 題

- 一、平成二十五年秋の吟行会の結果について
- 二、平成二十六年度俳句大会作品募集について
- 三、第一一一号会報について
- 四、現代俳句協会(本部)の動向について
- 五、平成二十六年度春の吟行会について
- 六、各研究句会の状況について
- 七、その他
- 八、次会幹事会及び平成二十六年度総会・俳句大会について

平成二十六年度第一回幹事会

日 時 平成二十六年一月二十八日(火)

場 所 船橋勤労市民センター

出席者 大畑、秋尾、渡辺、並木、檜垣、内田、高橋(宗)、野口、松澤、上野、大塚、小高、山崎、小林(俊)、小林(美)、白木、林、星野、細野、森村、矢野、吉野、長浜、下村、三須、久野、小張、高木

欠席者 清水、高橋(健)、木之下 (敬称略、順不同)

議 題

- 一、平成二十六年総会・俳句大会・懇親会について
- 二、新幹事の推薦について

三、平成二十六年度総会資料について

四、俳句大会応募句の経過報告

五、第一一二号会報について

六、平成二十六年度春の吟行会について

七、今年度の企画・活動について

八、顧問会議について

九、現代俳句協会(本部)の動向について

十、「現代俳句千葉」合本計画の報告

十一、その他

事務局・編集部だより

● 四月二十九日(火・祝日)に春の吟行会が開催されます。今回は柏市の柏の葉公園が舞台です。会場は、さわやかちは県民プラザ。皆さん、お誘い合わせてご参加ください。溜まっていた各研究句会の句会報を一挙に掲載しました。研究句会にも奮ってご参加を。

現代俳句千葉 第一二二号 平成二十六年二月二十八日発行	発行人 千葉県現代俳句協会 会長 大畑 等
現代俳句千葉編集部 〒278-0037 野田市野田六六五番地	松澤 龍一
千葉県現代俳句協会事務局 〒270-1471 船橋市小室町二八〇四	高木 一恵
電話 〇四七-四五七-二九一二 FAX 〇四七-四五七-二九七二	